

IHSの二十年

大阪YMCA国際専門学校

国際高等課程 国際学科 (IHS)

ディレクター 小路清一

ささやかな規模ではありましたが当時の教育国際化の先陣を切る学校としてYMCA・IHSの開校が賑々しくマスコミに取り上げられたのは、1988年4月のことです。それから20年。立ち上げ時の混乱や多くの失敗を乗り越え、留学を夢見る生徒、帰国生、外国籍・ダブル国籍の生徒、既存の学校に違和感を覚える生徒、不登校生、いじめられっ子等、様々な背景を持った生徒を懐深く受け入れてきたIHSの歩みは、一見不可能なことを可能ならしめるべく、生徒自身、また保護者と一体となって、「こうありたい」と強く願うことで築き上げられたものです。それは、突き詰めれば2点に集約される努力ではなかったでしょうか。「誰の(ための)学校なのか」と「生徒が在校時・卒業後に置かれる場(世界・時代)をどういうものと認識し提示するか」。この2点を肝に、一つのあるべき教育の姿に可能な限り近づべく私たちは歩み続けてきました。次の3名の卒業生が寄せてくれた思いの中に、この20年のエッセンスが垣間見られます。

卒業生からのメッセージ

創立20周年によせて

IHS1993年卒
(チエンマイ大学修士課程卒 在チエンマイ日本国総領事館勤務)

濱口 愛



18年前、夕方のニュースでYMCA・IHSがテレビ放映され、テレビ画面の向こうで1期生や2期生の先輩方が自分自身をしつかりと持ち、生き生きと表現して高校生活を送る様子に衝撃を受けたことを今でもまるで昨日のことのように鮮明に思い出せます。今、まさにこの原稿を書きながら、IHSが創立してもう20年も経ったなんて時の流れのあまりの早さにまだ

信じられない不思議な感覚を覚えます。

IHSに入学してからは躍動感あふれる毎日を過ごさせて頂きました。IHSでの3年間はどこにか楽しかったという思いが強く残っています。今でも「もし過去に後戻りできるならいつの頃に戻りたいか?」と聞かれたならば、躊躇なく「IHSの頃に!」と、答えることでしょうか。自由と責任、自己の覚醒と主張、個性や違い、そして協調と他者への思いやり等、そういった、偏重教育では決して教えてもらえなかった人生にとって大切なこと、且つ、それまでの自分の中で失いかけていたものを一気に取り返すことができた3年間だったように思えます。

IHSには多感な時期に本当に沢山の大切なものや新しい世界との出会いを頂いたと思っています。特にタイのチエンマイを訪れた修学旅行は私の人生にとっても大きな転機を与えてくれました。この時訪れたタイがなぜか不思議と私の心にとっても印象深く残り、卒業後はタイへの留学プログラムを持つ日本の大学に進学しました。そして同大学のプログラムに参加してチエンマイに約半年間留学したことで、日タイ両国を繋ぐ仕事に携わりたいという思いが強くなり、大学卒業後はタイの大学院に進学して社会開発問題を扱う学科で学びました。

(中略)

卒業後の10年

IHS1997年卒
(The University of Birmingham卒)

高原陽子

18年前のIHSとの出会いがなければ私は今ここにはいなかっただろうと思うと、IHSにもタイにも何か運命的なものを感じます。すべてが偶然であり、思い返すとそれらは必然でもあり、個人の努力や頑張りだけでは動かせない多くの人々との出会いや支えと、その背後にある何か大きな力(人はそれを「神」と呼ぶのでしょうか)に導かれていたことを思い、この先どこで何をしても高慢にならず、日常の中の小さなことに感謝する心を片時も忘れずに生きていきたいと願っています。

1997年にIHSを卒業し、10年が経ちました。IHS卒業後はイギリスの大学へ進学し、膨大な量の課題に追われながら、イギリス人のクラスメイトに負けるもんかと、それまでの自分では考えられないくらい



い必死で勉強しました。その後帰国し、留学や国際教育関係の仕事に約6年携わっています。就職先では入社1年目からアメリカや韓国などへの海外出張や海外来賓の対応を任せられ、高校時代から培ってきた英語力や国際感覚を役立てることができました。この10年を振り返ると、多様なものを吸収したいという気持ちを常に持っていたように思います。

そういった私の根本にあるものは何かと考えた時、やはりIHSでの経験が礎になっっている部分が大変いと実感しています。地元公立中学を出て入学した私にはとても刺激的な毎日、多様なバックグラウンドを持つ先生方や同級生の中で打ち砕かれた固定観念や価値観も多く、「世界には様々な人がいて、様々な考え方があり」ということを学ばされました。そこから、できるだけ多くの人と出会い、多くの考え方やものの見方を知り、多くのことを吸収したいと考えるようになり、留学への決意も固まっていきました。

教育関係の仕事をしていますが、自分の状況と比較して考えさせられることも多々あります。年間数百人の学生の海外進学相談をしてきていますが、私たちが高校生だった時と比べて格段に進路の選択肢が広がっているにも拘わらず、周囲の期待や学校の方針、将来の不安などによって、やり

創立125周年記念インタビュー

先達へ聞く! ⑤
鈴木誠吉さん



プロフィール
1955年 PSC入会、1958年 大阪サウスワイズメンズクラブ入会、1960年 大阪YMCA入会、1964年 南YMCA運営委員長、1968年 大阪サウスワイズメンズクラブ会長、1990年 ワイズメンズクラブ阪和部部長、現在 大阪YMCA評議会委員

内田 鈴木誠吉さんのYMCAとの関わりは、最初話し方講座にいられて、それから有志のPSC(パブリック・スピーキング・クラブ)に入り、さらにワイズに入会。それからまたYMCAの会員になられたとお聞きしました。YMCA会員になつた理由は何かですか?

鈴木 僕等は世戸一夫元総事にぞつこんほられていたわけです。世戸さんの魅力かな。世戸さんに「ワイズに入らないか」と言われた時に、すぐ、イエスと言いました。それは魅力的で有能な主事さんでした。その魅力で入会しました。今も僕はそれは変わらないと思います。YMCAの魅力は、主事さんの魅力。ただ近頃は主事さんが忙しすぎて、コンタクトの時間が少ないですね。だからこれから会員を増やそうと思ったから、ワイズのメンバーの魅力とコンタクトを増やしていくことも必要かもしれません。

内田 世戸さんについて私は本で読んだことしか知らないのですが、実際それだけ影響されるというのは、どうしてなのでしょう?

鈴木 世戸さんは、実業界出身で満州で会社を経営されてきました。それで戦後引き揚げてきて、ワイズの奈良伝さんと縁ができたそうです。実業界の経験、ボランティア精神

そしてキリスト教の影響。キリスト教のバックボーンを持って、実業界で活躍して、それでYの主事になつて、ものすごい強烈な情熱があった人です。そういう過去のキャリアが影響していると思います。サラリーマンでは全くない、ボランティアで一生やろうという気持ちがすごく強かった人です。世戸さんとYMCAと縁ができてよかったのは人脈です。これはもうすごい大勢の人脈ができました。また私も、YMCAに入会しなければ、仕事に埋没して、多くの人との縁は全くなかったと思います。YMCAだからこそできたと思います。しかしこれから厳しい社会環境の中、ビジネスの世界にながら、YMCAに関わる時間がないかなが出てこないかも知れません。私も今も今の人脈もと厳しいから、よっぽどYMCAが吸引力というものを持たないと、YMCAに足を向けることは難しいかも知れません。

YMCAのスタッフと会員にこれから求められるのは、世戸さんが示された信・望・愛を実践する姿ということだと思っています。

(聞き手：内田弘志・統括本部スタッフ)